

# 現地のサンバ指導法とサンバ教材化研究

林 夏木 (四国大学)

## 1. 問題の所在と研究目的

2019年4月に改正出入国管理法の施行、2020年には東京オリンピック開催など、今後我が国の外国人居住者数・旅行者数の増加が見込まれる中、多様な文化、民族、価値観への理解が教育現場にも求められている。学校教育におけるフォークダンス学習は「世界の文化に触れることも大切」(小学校学習指導要領 2017 告示)とされ、国際教育としての価値が示されているが、扱われている地域は欧米が中心であり、アフリカ・中南米・アジア諸国の教材は著しく不足している。また渡辺(2015)は、フォークダンスの教育的効果を高めるため、教師は踊りの由来、その地域の伝統や特徴を理解する必要がある、としている。本研究は、南米ブラジルの代表的なフォークダンスであるサンバの教材化の第一段階として、その発祥の地であるバイーア州ヘコンカーヴォ地域のコミュニティ、小中学校、舞踊学校において、「サンバ・ジ・ホーダ」<sup>註1</sup>がどのように伝承・指導されているかを調査し、学校体育のフォークダンス学習として相応しい指導内容の考案を目的とする。

表1 現行のフォークダンス教材(文部科学省 2013)

小学校第1-2学年	ジェンカ(フィンランド)、キンダーボルカ(ドイツ)、タロチカ(ロシア)
小学校第5-6学年	マイム・マイム(イスラエル)、コロブチカ(ロシア)、グスタフ・スコール(スウェーデン)
中学校第1-2学年	オクラホマ・ミクス(米)、バージニア・リール(米)、ドードレブスカボルカ(旧チェコ)
中学第3学年 高校入学年度次	ハーモニカ(イスラエル)、オスローワルツ(英)、パティーク・ボルカ(米) ヒンキー・ディンキー・バーリー・プー(米)
高校その次の 年次以降	トゥ・トゥール(デンマーク)、ミザルー(ギリシャ)、アレクサンドルフスカ(ロシア) タンゴ・ミクス(米)

## 2. 研究方法

ヘコンカーヴォ地域において、サンバおよび舞踊に関わる人々への半構造的インタビューと指導法の観察および撮影を行う。対象者は、ヘコンカーヴォ地域の主要舞踊教育機関であるバイーア連邦大学付属舞踊学校の教員3名とバイーア州立舞踊学校の舞踊指導者2名、また「サンバ・ジ・ホーダ」が盛んなSanto Amaro周辺地域にて、その継承を牽引する2名である。それらの結果を踏まえ、教材の対象学年次も含めたサンバの指導内容を検討する。

## 3. 結果

1) 踊る目的、特徴、習得法：対象者5名へのインタビュー結果から「サンバ・ジ・ホーダ」を踊る目的は以下3点にまとめられた。①地域・家族間の繋がりの強化と喜びの共有、②アフリカのアイデンティティ維持と自己肯定感の向上、③リズムによる身体性の喚起、などであった。特徴としては、音楽と他の踊り手に触発されながら即興で踊られる点が挙げられる。習得法は、小中学校のカ

リキュラムにダンス学習は含まれておらず、地域の祭りや行事などで「模倣による習得」が主であった。円(ホーダ)の中心で一人または複数で踊ることが促され、「褒めて育てる」が基本であった。

2) 小中学校のダンス学習：サルヴァドール市内の私立小中一貫校で毎年2ヶ月間実施されるダンス学習の調査では、サンバは踊られていたが、「サンバ・ジ・ホーダ」の指導はされておらず、内容は派遣された各舞踊指導者に任されていた。

3) サンバ指導法：バイーア州立舞踊学校における指導では、全身のリラックス→基本のステップを足の裏全体で踏み練習(手拍子や口唱歌を入れることもある)→基本のステップを踏みながら前後左右の移動へと発展させていた。「サンバ・ジ・ホーダ」の指導では、円の中心で一人または二人で交流しながら踊ること、踊っていない人は手拍子で基本リズムを取り続けることを促していた。

4) 指導内容の検討：調査結果を踏まえ、小学校高学年向けに考案した指導内容を表2に示す。

表2 指導内容の考案

サンバの由来 なぜ踊るのか?	ポルトガル植民地時代、アフリカからの奴隷達が、仲間や家族との絆を深め喜びを共有したり、過酷な労働や貧困の苦しみを一時的に癒す目的があった。また、祖国アフリカへの思いや誇りも込めて、自分の存在価値を認める意味もあった。さらに、アフリカのリズムに合わせて踊ることで、先祖から伝わる体の使い方を継承する目的もあったと考えられる。奴隷制は19世紀末に廃止されたが、現在でも同様の目的で踊っている人達は多い。
サンバの特徴	音楽と他の踊り手に触発されながら即興で踊る。生演奏では、踊り手は音楽の変化に反応して動きを変化させ、また演奏者も踊り手の動きの変化に反応して音楽を変化させることで一体感を生む。また、演奏者と踊り手で円(ホーダ)を作り、その中心で一人または複数で踊る「サンバ・ジ・ホーダ」がサンバのはじまりと言われている。
使用する音楽	音楽は本来、歌、打楽器、ギター等で編成され、演奏者と踊り手のコミュニケーションが重要であるが、授業ではCDやMP3を使用するため、基本リズムが打楽器でしっくり刻まれ、コール&レスポンスの簡単な歌も入れられる音楽が望ましい。教師や児童が学校に既存する打楽器で簡単なリズムを演奏することも一案である。
基本のステップ 指導法	全身をできるだけリラックスさせるため、最初に体の各パーツを緩め、骨盤を揺らしながら歩行する等を行う。基本のステップを移動せず足の裏全体で踏み、その後、前後左右の移動へと発展させる。手拍子や口唱歌、可能であれば歌を入れながら踊ることを目指す。
サンバ・ジ・ホーダ 指導法	サンバ・ジ・ホーダでは、他者との絆を深めたり、喜びを共有するダンスであることを意識して、円(ホーダ)の中心で踊る人を他の人達が歌や手拍子、打楽器などでサポートする。「褒めて育てる」を基本に、踊りを通し各児童が安心して自分を表現すること、それによる自己肯定感の向上を目指す。基本のステップを繰り返しながらも、リズムに喚起・誘導される動きをそのまま素直に体で表すよう促す。

## 4. 考察と今後の課題

サンバは、基本のステップを基盤としつつも、演奏者や他の踊り手と関わりながら即興で独自の動きも交えて踊られることにその特徴がある。その特徴や踊る目的を生かした指導のために、①「模倣による習得」をどう進めるか、②独自の動きをどのように引き出すか、③「褒めて育てる」指導の評価基準はどうするか、など今後の教材化研究における検討課題が見出せた。

註1：演奏者と人々で作るホーダ(円)の中で、一人または複数で踊られるサンバの最も古いスタイルの名称

### 主要参考文献

Katharina Doring, 2016, "A Cartilha do Samba Chula"  
文部科学省, 2013, 「表現運動系及びダンス指導の手引」  
渡辺律子, 2015, 「学校体育におけるダンス教材について-フォークダンス教材を事例として-」『教育学部紀要』文教大学教育学部第49集, pp. 169-176.